

近世詩人伝記と作品の小型データベースを使った可視化ツール

フィンク ウィクトル

近世の歴史と文学を研究するにあたってある人物の友人関係、師弟関係、親族、作品の序跋文に出てくる名前、旅先で泊まる知人やパトロン等々の情報を調べるに便利なデジタル、または紙の辞典はすでにたくさん存在する。『日本大百科全書』、『日本人名大辞典』、『ブリタニカ』などはコトバンクなどのサービスによってインターネット上公開され、『国史大辞典』、『近世漢学者伝記著作大事典』といった研究に欠かせない道具書、個々の伝記研究、第一資料の情報を提供するデータベースには国際日文研究センターの『近世畸人伝データベース』等である。こういった情報の系統的な整理を試みたプロジェクトには例えばベティーナ・グラムリヒ＝オカの『日本の人名データベース』が存在し、大規模なネットワーク分析を目的とする。

本発表ではこういった情報源を元にした小型のデータベースを扱う。簡単なフォーマットの JSON/BibJSON ファイルより構成される GoogleFirebase と Angular フレームワークを使った小型のデータベースの可視化によって人物情報より視野を広げて、時代背景や文化活動の分野、どの研究文献の文脈にどういった趣旨で言及されるかなどといったデータをいかにデジタル化し、可視化するという問題の解決策を紹介する。自分の博士論文の主題である大窪詩仏をとりまくネットワーク、または江戸漢詩の注釈書と詩史、詩人に関する既存研究を中心にして、人文の研究にとってどの機能をはたせるのかという疑問に答えてみたい。そして、そういったツールの限界をも考察する。 デジタル人文を通しての文献整理、ノートの共有、研究者の共同作業といったテーマをもとりあげる。